

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 30 日現在

機関番号：32668

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380769

研究課題名(和文)「里孫」活動(高齢者と子どもの互恵的交流活動)の効果に関する研究

研究課題名(英文) A study on the effect of "SATOMAGO" activity (reciprocal exchange activity between elderly and children)

研究代表者

永嶋 昌樹 (NAGASHIMA, Masaki)

日本社会事業大学・公私立大学の部局等・助教

研究者番号：80439009

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：「里孫」活動は、世代間交流活動の一形態であり、お互いに血縁関係にない高齢者と子どもが擬似的な祖父母-孫関係を結び交流を深める、互恵的なボランティア活動である。継続的な活動のためには、高齢者と子どもとのマッチングに介入する教員・施設職員等のコーディネーターの役割が非常に重要である。

現在、施設に入所している高齢者の要介護状態の重度化と、そして、子どものコミュニケーションスキルの低下が懸念されている。そのため、コーディネーターの適切な関与が、今後の「里孫」活動の進展に影響を与えると考えられる。

研究成果の概要(英文)："SATOMAGO" activity is a form of intergenerational exchange activity. It is a reciprocal volunteer activity that elderly people and children who are not related to each other deepen their relationship by connecting pseudo grandparents - grandchildren relations. For continuous activities, the role of coordinators such as teachers and faculty staff involved in matching between elderly and children is very important. At present, there is concern that the elderly who is in the facility will become more severely in need of nursing care status and the child's communication skill will decrease. Appropriate involvement of the coordinator is thought to affect progress of "SATOMAGO" activities in the future.

研究分野：社会福祉学

キーワード：擬制的祖父母-孫関係 世代間交流

## 1. 研究開始当初の背景

「里孫」活動は、世代間交流活動の一形態であり、お互いに血縁関係にない高齢者と子どもが疑似的な祖父母・孫関係を結び交流を深める互恵的なボランティア活動である。

研究開始当初は、数例の実践報告を除き「里孫」についての学術的な調査・研究報告はなされていなかった。本研究代表者による2011(平成23)年の論文・口頭発表が唯一であった。

総務省によると、2011(平成23)年10月1日現在で、わが国の高齢化率は23.3%であり、さらに国立社会保障・人口問題研究所の推計によれば、2025(平成37)年には30.3%に達すると推計されていた。また、厚生労働省の2011(平成23)年国民生活基礎調査によれば、全世帯数に占める三世帯世帯の割合は7.4%であった。1986(昭和61)年の15.3%と比較して、減少傾向は顕著である。高齢者の割合は増え続けるが、高齢者と孫世代の子どもが触れ合う機会はそれに反して減少しており、世帯あるいは住環境という視点から、血縁関係にある祖父母と孫の日常的な関わりは、三世帯世帯の減少に比例して確実に減少するものと考えられた。

このように高齢者と子どもが触れ合う機会が減少し、互いに異世代とのコミュニケーションが不足することへの危惧から、特に近年、異世代間の交流の必要性が頻りに叫ばれるようになってきた。実際に、高齢者集団と子ども集団との交流を主とした、集団的・単発的な世代間交流活動は全国各地で行われているが、より個別的で継続的な活動である「里孫」活動はほとんど知られていない状況であった。

## 2. 研究の目的

本研究では、「里孫」と呼ばれる世代間交流活動を“より個別的で継続性のある高齢者と子どもの互恵的交流活動”と定義し、その効果の検証と新たな実践モデルを提唱することを目的とした。

少子高齢化の進展とともに高齢者のみの世帯が増え、高齢者の社会的孤立が進んでいる。高齢者の孤独死も、今後ますます増加すると推測される。また、これと並行するように、子どもの引きこもりやコミュニケーション能力の低下が社会的な問題となっている。

本研究は、これらを同時に解決する手段としての「里孫」活動に着目し、その有効性を検証し、高齢者と子どもが疑似的な祖父母・孫関係を結び、新たなモデルの提唱を目指した。

具体的には、全国の里孫活動の実態を明らかにし、体系的に整理すること、里孫活動の効果を検証すること、里孫活動の継続を抑制する要因を明らかにすること、を通して、「高齢者と子どもの新たな交流モデル」を提案することを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 里孫活動の活動状況の実態把握

予備研究で対象としていた機関・団体のなかで、「里孫」活動を止めてしまった事例が判明したため、対象となる活動についての調査をあらためて実施した。

Web検索にて「里孫」が含まれるサイト・文書・画像等を検索し、検索結果より上位250件のサイト・文書・画像等の内容を全て確認した。なお、「…里、孫…」や人名等、明らかに里孫とは関連性がないと判断できるサイト・文書・画像等、さらに海外で行われている類似の活動に関するものは除外した。

なお、新たに「里孫」活動を始めたり、また、過去の活動がWeb上で紹介されること等が想定されたため、活動状況の実態把握については研究期間を通じて適宜実施した。

### (2) 全国の里孫活動の体系的整理

前項(1)により新たに判明した機関・団体の担当者から「里孫」活動の文献等資料を収集し、資料で不明な情報については担当者への聞き取りを実施した。

その結果を、「活動・制度等の名称」、「活動形態」、「活動が行なわれている地域」、「実施主体」、「里孫の所属」、「里孫の学年・年齢」、「里孫の訪問場所」、「実施期間(有期・無期)」、「活動・制度が開始された時期」等の項目により整理した。

### (3) 里孫活動の効果

(2)の整理に基づき、世代間交流を目的として行われている「里孫」活動であって、現在も継続中のものについて、担当者等への聞き取りを行った。

里孫のパターンは多岐にわたり、しかも、それぞれの類型に属する事例の数は少ないため、効果を定量的に表すのには困難であった。

そのため、それぞれの担当者への聞き取りにより、固有の要因を抽出することとした。

インタビューは趣旨を説明した後、同意を得られた場合に限りICレコーダで録音した。録音データは文字データに変換したうえで、テキストマイニングによって質的に分析した。

調査時期：2014年8月～2017年3月

調査対象：里孫活動を行っている機関・団体の担当者

調査方法：半構造化面接法による聞き取り調査

調査内容：主な調査内容は、「活動を始めた経緯」、「これまでの経過」、「活動の意義」、「担当者が感じている効果」、「継続できている理由」、「活動の評価方法」等である。

倫理的配慮：質問に対する回答は任意であること、施設名や回答者名は特定されないようにすること等を事前に説

明して了承を得た。

#### (4) 里孫活動の継続を抑制する要因

(2)の整理に基づき、世代間交流を目的として行われていたが、既に中止された事例について、里孫活動の抑制要因を探るための調査を実施した。

調査時期：2014年8月～2017年3月

調査対象：里孫活動を中止した機関・団体の担当者

調査方法：半構造化面接法による聞き取り調査

調査内容：主な調査内容は、「里孫活動の実施から中止までの経過」「中止の理由」「担当者が認識している中止時点での課題」「今後の展望」等である。

倫理的配慮：質問に対する回答は任意であること、施設名や回答者名は特定されないようにすること等を事前に説明して了承を得た。

#### 4. 研究成果

##### (1) 里孫活動の活動状況の実態把握

「里孫」を検索ワードとして、里孫活動の事例をWeb検索した結果、2010年10月の時点では14事例が確認されていた。しかし、それ以降、既に数年が経過していたため、「里孫」活動の実施状況が変わっている可能性があった、そのため、2016年11月に「里まご」「さとまご」を加えて新たに検索を行ったところ、2010年10月以降に新規に活動を開始した事例を含め、計19事例を確認することができた。

そのうち2017年3月現在まで活動が行われているのは12事例である。なお、実態として実施されていることが確認できていないが、行政に文書等に「里孫」等との記載があるものが、前述の19事例以外に5事例存在した。

##### (2) 全国の里孫活動の体系的整理

Web検索により連絡先が確定できる17件の事例を比較・分析の対象とした。

比較の結果は次の通りである。

###### 活動・制度等の名称

「里孫」という用語を使った取り組みは、「里孫制度」「里孫活動」「里孫実習」「里孫運動」など様々な呼び方をされていた(表1)。このうち「里孫実習」は授業内での取り組みを、「一日里孫」は期間の限定性を表していると推測しやすいが、他は必ずしも活動内容が一定ではない。また、呼び方は異なるが、内容がほぼ同一の取り組みもあった。これまで「ハートフルタイム」という呼称であったものを、わかりやすい表現にするという意図で「ハートフルタイム(里孫実習)」とした事例もある。これは「里孫実習」と分類した。

なお、これらの名称・呼称は、原則として「里孫」活動を行なっている団体等が使用しているものとしたが、既に活動・制度が中止

されている事例、関係者の退職などによりその経緯が不明である事例については、文献等で使用されたものを名称・呼称をとって扱った。

表1 「里孫」活動・制度等の名称

名称	件数
里孫制度	3
里孫活動	3
里孫実習	2
里孫ボランティア	2
里孫運動	1
里孫体験学習	1
さとまご実習	1
里孫体験交流制度	1
里孫制	1
里まごクラブ	1
一日里孫	1
合計	17

###### 実施主体(学校・施設・ボランティア)

本稿では、「里孫」となる者を募集・取りまとめ・管理あるいは指導し、制度・活動を主体的に運営している組織・機関・団体等を「実施主体」とした。例えば、学校と高齢者福祉施設との間で実施されている「里孫」の取り組みでは、学校が授業の一環として児童生徒を里孫としている場合は学校を、高齢者福祉施設が学校を介して里孫を募集している場合は高齢者福祉施設を、それぞれ実施主体とした。なお、学校と高齢者福祉施設が、相互の連携により共同的に実施している場合は、開始時期において当該制度・活動を発案または働きかけを行なった側を実施主体とした。

表2 「里孫」の実施主体

名称	件数
学校	6
高齢者福祉施設	7
社会福祉協議会	3
その他	1
合計	17

###### 里孫の学年・年齢

里孫となる年齢は、3歳から成人まで幅広く、成人の年齢は特定できない。しかしながら、学校等を介している場合は、その学校に所属する児童・生徒・学生の年齢が規定され

る。また、高校卒業以上の者を入学対象とする専門学校は、18歳以上の様々な年齢層が存在し得るが、実際には20歳前後であろうと考えられる。よって学校等を介した活動では、その学校の種別と学年によって里孫の年齢が規定されるといえる。実施主体が「高齢者福祉施設」「社会福祉協議会」等の学校以外であっても、学校に働きかけて協力を求める事例、高校生のボランティアに限定する事例も見られることから、里孫の年齢はほぼ20代前半までである。

現在行なわれている「里孫」活動は、実施主体以外も含め小学校は5校、専門学校も5校が関わっているため、里孫の中心は小学生と専門学校生であるといえる。小学校では5校全てが3年生以上を対象としているため、里孫の年齢は9～12歳である。また、専門学校では2年制が4校、4年制が1校であるため、里孫の年齢は19～22歳である。小学校及び専門学校の各校によって里孫の活動内容や人数が異なるため、単純な比較はできないものの、「里孫」活動に里孫として関わっている者の年齢が、二極化していることは明らかである。表3は、学校種別ごとに分類した、里孫の学年・年齢の一覧である。

表3 里孫の学年・年齢

名称	件数
学齢前	1
小学生	5
中学生	1
高校生	4
専門学校生	5
特に制限なし	1
合計	17

### (3)里孫活動の効果

各実施機関へ出向き、担当者への聞き取り調査を実施した。主な調査内容は、「活動を始めた経緯」「これまでの経過」「活動の意義」「担当者が感じている効果」「活動の評価方法」「継続できている理由」等である。

聞き取りの結果として、すべての担当者が、活動を行うことが高齢者と子どもとにより影響を与えることを指摘していた。たとえば、小学生であれば「高齢者への思いやり」であるとか、「困っている人を助けようとする行動」等である。

また、調査時点で「継続できている理由」についても尋ねた結果から、次のような示唆が得られた。より有効な交流モデルを検討する上で有意義であると考えられる。

第一に、里孫としての子どもを送り出す機関と、対になる高齢者に関わる機関の双方が、

活動の目的・意義・理念等を共有していることが重要と考えられること。

例えば、子ども側にあまりメリットがない場合でも高齢者の生きがいづくりに貢献していること、高齢者の側にほとんどメリットがない場合でも子どもの発達に寄与していること等を、互いの共通理解としておくことが継続には重要であると考えられた。

第二に、1年間というような必ずしもある程度の期間を経なくても、子どもと高齢者が濃密な時間を過ごすことで、双方に何らかの好影響を与えることは可能であること。「一日里孫」という活動もあり、これは個別であるが継続性はない。しかし、高齢者宅に一晚寝泊まりし、終日寝食を共にすることでお互いの情緒的交流が図られる。期間は短い、お互いが交流する総時間数としては他の里孫活動とあまり差異はない。

### (4)里孫活動の継続を抑制する要因

里孫活動を実施していたものの、何らかの理由で中止した機関・団体のうち、担当者と連絡が可能であった5事例を調査した。調査対象の機関・団体の内訳は、認可外保育施設1、通所リハビリテーション事業所1、社会福祉協議会1、特別養護老人ホーム、有料老人ホーム1である。

活動中止の理由は、「先方から断られた」「いつの間にかお互いに連絡を取らなくなった」「機関の再編により活動が困難になった」など様々であった。活動の類型によって異なるものの、それぞれ

- ・機関自体の事情（例えば、予算、機関自体の存続に関するリスク等、）
- ・機関に属する高齢者・子どもの事情（疲れる、気を遣う等、）
- ・機関に属する高齢者・子どもの家族の事情（高齢者への偏見、子ども嫌い等、）

等が、活動を中止する原因となっている。

これらは、里孫活動を継続することの抑制要因として働くと考えられる。

活動を抑制する要因としては、里孫の派出側（子どもが所属する機関・団体）と受入側（高齢者が所属する機関・団体）の、双方のコーディネーターの連携・協働体制の不具合等が、推測される結果となった。

また、双方の担当者のコミュニケーションが何らかの原因で密でなくなると、相手方に対してそれぞれ誤解を抱く可能性があることが示唆された。これも抑制要因として働くと考えられた。

ところで、里孫活動はその中心的な取り組みは学校と福祉施設との間で行われているが、社会福祉協議会が中心的な役割を果たしていた事例が3件存在した。これらはすべて中止され現在は行われていない。この中で当時の担当者で連絡が取れたものは1件であった。

他にも社会福祉協議会が関与している事例があるが、社会福祉協議会自体は重要な役

割を果たしているとは言い難い。本来、社会福祉協議会が仲介者・調整役であると考えられるが、里孫活動についていえば、社会福祉協議会が関わらない事例の方が長く継続している。

里孫はあくまでも疑似的な祖父母 - 孫関係を結ぶものであるから、「一日里孫」のように面識のない両者を短期的かつ長時間にわたり交流してもらう形態は、一方では双方の負担につながる可能性がある。

24時間を集中して共に過ごすよりも、例えば、週1回程度の高齢者宅の訪問を、24週にわたり行うほうが、負担感が少なく、かつ心身の疲労度合いを少なくすることができるかも知れない。

#### (6)まとめ

年々高齢化が進み、介護を必要とする高齢者の実数が増加している。それに伴い、要介護高齢者が入所する施設も増えてきたが、全国の入所待機者数は現時点で約42万人にもなる。申込の順番だけではなく緊急度を総合的に判断して入所順位が決まるため、「里孫」活動が主たる対象とする施設入所高齢者の要介護度は確実に上昇している。また、認知症の高齢者も増える傾向にある。

「里孫」活動には、世代間交流を目的とした活動と、福祉専門職等を目指す学生の対人スキルの向上を図ることを目的とした活動の2つがあるが、要介護度と認知症の重度化は、前者にとっては抑制的に作用していると考えられる。実際、特別養護老人ホームと小学校の複数4の担当者が、「重度化」を里孫活動の様態の変化の理由として挙げている。

里孫となる子どもが高齢者に話しかけても、期待していたような返答でなかったり、あるいは返答自体が返ってこなかったりするため、要介護度が高く認知症が重度の場合は、コミュニケーションが容易に成り立たないことがある。施設入所者の中で重介護者の比率が高くなれば、里孫に対応できる高齢者の割合が減るだけでなく、里孫にはより高いコミュニケーションスキルが求められるようになると考えられる。福祉・医療の専門職を目指す学生であれば、むしろその方が勉強にはなるかもしれないが、交流を目的とする小学生に対しては「疑似的な祖父母」とはなりにくいであろう。

実際に「里孫」活動を続けている学校や高齢者福祉施設の担当者の何人かは、要介護度の重度化による活動の変容を指摘している。つまり、里孫の相手ができる入所者が少なくなっているのである。もちろん、要介護度の高い高齢者には「里孫」が適さないとは言い切れない。寝たきりや重度の認知症であっても、その状況に応じたそれなりの関係は成立すると考えられるからである。

しかしながら、高齢者の側が重度である場合、その里孫になる子どももまた限定されてしまう。里孫のコミュニケーションスキルが

未熟であれば、交流が成り立たない可能性がある。これは双方のマッチングの問題であろう。そうだとすれば、そのマッチングに介入する教員・施設職員等のコーディネーターの役割は非常に重要である。施設入所高齢者の重度化と、子どものコミュニケーションスキルの低下が懸念されている現在、コーディネーターのあり方が、今後の「里孫」活動の進展に影響を与えると考えられる。

当初の計画では、「里孫」交流モデルの試案を作成し、最終年度に試行事業を実施する予定であったが、試行を予定していた施設の担当者の異動、感染症（インフルエンザ）の流行等の事情により実施までには至らなかった。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計1件）

発表者：永嶋 昌樹

発表表題：個別のかつ継続的な世代間交流活動の抑制要因の検討 九州地方における里孫活動の事例から

学会名：第23回日本介護福祉学会大会

発表年月日：2015年9月27日

発表場所：金沢市文化ホール（石川県金沢市）

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

永嶋 昌樹（NAGASHIMA, Masaki）

日本社会事業大学・通信教育科・助教

研究者番号：80439009

##### (2)研究分担者

関口 明子（SEKIGUCHI, Akiko）

聖徳大学・児童学部・准教授

研究者番号：70439008